

オーストラリアの中等教育における行動規範について

A Study on the code of conducts at secondary schools in Australia

キャリアセンター・教職支援室

山本 正

YAMAMOTO, Tadashi

Career Center

キーワード：オーストラリア，中等教育，行動規範，ガイドライン，ゼロトレランス

Abstract： The purpose of this study is to clarify the code of conducts and the reaction to the violation of the rules at secondary schools in Australia. Followings are the attitude of the State Government, schools, and parents toward the matter.

First, State Government has a great influence on schools. The government sets the guidelines for the code of conducts. Second, schools try to make efforts to maintain well-ordered learning circumstances, setting their own strict school rules which are based on the state guidelines. And they have “zero-tolerance” like strict procedure against breaking school rules. Lastly, parents are required to cooperate with schools. But before being requested, they tend to solve their children's problems independently.

There are big differences between Japan and Australia in terms of this matter. The differences seem to be derived from the social structure, history, and cultural background.

Keywords： Australia, Secondary Education, Code of Conducts, Guideline, “Zero-tolerance”

I. はじめに

生徒指導の在り方は学校教育の質を左右する大切な問題である。円滑な教育活動は確かな生徒指導の上に成り立つからである。我が国の子どもたちの規範意識が問題視されて久しいが、一向に改善の気配は見られない。中学校教育に関わってきた者として、この問題に取り組む必要を強く感じている。

ところで、筆者は、平成15年3月から3年間、メルボルン日本人学校の校長を務めた。そこでみたオーストラリアの子どもたちは、日本の子どもたちより子どもらしく素直な印象であった。制服をきれいに着こなして通学している姿を見ると、「古き良き時代」の日本の子どもたちを思い浮かべてしまう。学校における生徒指導だけが子どものありように影響を与えるわけではないが、何かそこにも成功の秘訣が隠されているかもしれないと感じた。そこで、海外勤務というせっかくの機会を生かして、現地の生徒指導の事情をみておこうと考えた。

さいわいなことに、メルボルン日本人学校はビクトリア州に認可された私立学校であったので、いわば

「現地校」の立場から、オーストラリアの教育についてさまざまな情報を得ることができた。もちろん、学校経営上の必要から現地の教育関係者との交流や現地校を訪問する機会にも恵まれた。

ここでは、そういう機会などに入手した現地校の行動規範やそれを逸脱した時の対応などについてふれてみたいと思う。なお、ここで、中学校と高等学校を区別しない理由は、オーストラリアではそれらをセカンダリーカレッジとして一体的に経営しているからである。

II. オーストラリアの行動規範

1. 行動規範

(1) 州のガイドライン

オーストラリアでは、州が行動規範のガイドライン（原則）を規定している。学校はそのガイドラインに沿ってそれぞれの事情にふさわしい行動規範を設けている。

表1はビクトリア州のガイドラインである。

表1 ビクトリア州における行動規範のガイドライン

- (1) 各個人は尊重され大切に扱われる。
- (2) 生徒は、からかいやいじめのない、そして安全な環境の中で学習する権利がある。彼らは、自らの才能を伸ばし、志を達成することができる。
- (3) 保護者は、子どもたちが大切にされ互いの権利を尊重し合う、安心できる環境の中で教育を受けることを期待する権利がある。
- (4) 教師は、秩序ある協力的な環境の中で教えることができる。
- (5) 保護者は、望ましい学習環境を維持しようと努めている学校を支える義務がある。

The Hands on Guide : School Principals Legal Guideより

(2) 各校の行動規範

各校の行動規範は、スチューデントダイアリーやスタッフマニュアルなどで知ることができる。ここに、子どもたちへの伝え方が異なる3校の具体例を示しておく。いずれも日本の公立校にあたるガバメントスクール（州立の学校）のものである。

〈A校〉

まず、A校の行動規範である（表2）。単純明快、具体的でわかりやすい。

〈B校〉

次はB校の例である（表3）。権利と義務に分けて示している。よく見るとビクトリア州のガイドラ

インを概ねそのまま用いていることがわかる。

ただ与えるだけでなく、“BIG FIVE”という各自に考えさせる工夫をしている点がおもしろい。

〈C校〉

最後はC校の行動規範である（表4）。「強調しておきたい原則」をみればわかるように、これはビクトリア州のガイドラインそのものである。そして、学校はそのガイドラインに具体的で細かい説明を加えている。

こういう具体的な記述はオーストラリアの事情を理解する上で大いに参考になる。字数は多いが全文を紹介しておきたい。

表2 A校の行動規範

許されない行為

- (1) 身体的あるいは言葉による暴力をはたらくこと
- (2) 喫煙、飲酒、不法なドラッグを使用すること
- (3) 危険物、武器等を携帯すること
- (4) 学校や他人の住居等を汚したり破損したりすること
- (5) 服装規定に違反すること
- (6) 運動場から、またはフェンス越しに、部外者と話をすること
- (7) Year 7～10の生徒（義務教育課程）が学校敷地外に出ること
- (8) 校内で自転車に乗ること、スケートボードやローラースケート、ローラースケートで遊ぶこと
- (9) リセス（休憩時間）や昼食時に教室に入ること
- (10) 建物の屋根や歩道の屋根、3階建ての建物の外の通路に出ること
- (11) 敷地内や校舎の中にごみを散らかすこと
- (12) 廊下において、他の生徒たちや教職員の安全な移動を損なう行為をすること

表3 B校の行動規範

(a) 権利

- (1) 学校のすべての構成員は、敬意をもって対応される権利がある。
- (2) 生徒は、授業妨害のない環境で学ぶ権利がある。また教師も授業妨害のない環境で授業を行う権利がある。
- (3) 生徒と教職員は、B校の中で安心して過ごす権利がある。
- (4) 生徒と教職員は、安全で美しい環境で学ぶ（働く）権利がある。
- (5) 保護者は、子どもたちが大切にされ、他者への敬意が尊重される環境において教育を受けることを期待する権利がある。

(b) 義務

- (1) 生徒は、学習の過程において課題を生産的に進め、授業に協力する義務がある。
- (2) 教師は、子どもたちのために可能な限りベストな教育を与える義務がある。
- (3) 自己の安全のために、また、他者が安全であり安心感をいだくことができるようにふるまうことは生徒や教職員の義務である。
- (4) 保護者は、望ましい学習環境を維持しようと努力している学校を支える義務がある。
- (5) 保護者や教職員は、生徒の行動規範について公正で常に妥当に対処する義務がある。

警告 もし行動規範を破れば重大な結果を招きます ※次の「ビッグ5」をホームグループなどで討議しなさい
The “BIG FIVE”

- (1) それは安全か
- (2) それは公正か
- (3) それはあなたや学校にとって良いことか
- (4) それは望ましい学習環境に貢献するか
- (5) 学校はあなたの所在を知っているか

表4 C校の行動規範

強調しておきたい原則

- (1) すべての個人は大切にされ、敬意をもって扱われる。
- (2) 生徒は、すべての学習課題を自分で行う責任がある。
- (3) 生徒は、おどしやからかい、いじめのない安心できる環境の中で学習する権利があり、自らの才能を伸ばし、志を達成することができる。
- (4) 保護者は、子どもたちが大切にされ互いの権利を尊重し合う、安心できる環境の中で教育を受けることを期待する権利がある。
- (5) 教師は、秩序ある協力的な環境の中で教えることができる。
- (6) 保護者は、望ましい学習環境を維持しようと努力しているC校を支援する義務がある。
- (7) 校長や教職員は、生徒の行動規範について公正で常に妥当に対処する義務がある。

生徒が守るべき規則

- (1) すべての個人は大切にされ、敬意をもって扱われる。
 - ・いつでも礼儀正しい言動が求められる。不作法や攻撃的な態度は許されない。
 - ・低俗、差別的、性的な言葉や差別的行為は許されない。
 - ・他の生徒や教職員と良好な関係を結ぶことが困難な生徒は、Student Welfare Coordinatorや外部機関と相談する機会が与えられる。
- (2) 生徒は、すべての学習課題を自分で行う責任がある。
 - ・参考文献・引用文献等の出典を明らかにすること。
 - ・盗用は評価の対象にならない。
 - ・カンニング等の不正行為は許されない。
- (3) 生徒は、おどしやからかい、いじめのない安心できる環境の中で学習する権利があり、自らの才能を伸ばし、志を達成することができる。
 - ・いじめ、けんか、暴力、からかいなどは許されない。
 - ・ナイフなどの危険物の所持を禁止する。
 - ・喫煙、処方されていない薬の摂取、飲酒などを禁止する。
 - ・たばこ、ライター、マッチ、ドラッグ、酒などの所持を禁止する。
 - ・つばを吐いてはいけない。
 - ・金属製の定規は禁止する。ただし、教師から渡されたものはこの限りではない。
 - ・学校関係者以外は、校長の許可を受けなければ校内に立ち入ることはできない。
- (4) 保護者は、子どもたちが大切にされ互いの権利を尊重し合う、安心できる環境の中で教育を受けることを期待する権利がある。
 - ・すべての生徒は廊下を歩くときキープレフトを守る。階段の上り下りについては特に注意を要す。
 - ・人を押したり廊下を走ったりすることは禁止されている。
 - ・屋根に上がってはならない。
 - ・他人の落とし物を自分のものにしてはならない。
 - ・保健室は先生の許可を受けた者でなければ利用できない。
 - ・貴重品を持ってきてはならない。
 - ・携帯電話は受付に預けること。
 - ・自転車は鍵をかけて自転車置き場に置いておくこと。
 - ・学校に大金を持ってきてはならない。必要なお金は受付に預けること。
 - ・スケートボードやローラースケートは禁止する。
 - ・窃盗や器物破損は絶対に許されない。
 - ・生徒は学校内でモーターバイクや車に乗ることはできない。
 - ・始業のベルが鳴るまでは学校に入ってはならない。
 - ・放課後はすみやかに校舎を出ること。
 - ・生徒は学校の美化に責任を負っている。
 - ・ごみはごみ箱に入れなければならない。
 - ・チューイングガムは禁止する。
 - ・修正液やフェルトペンを学校に持ってきてはならない。
 - ・校庭で自転車に乗ってはならない。
- (5) 教師は、秩序ある協力的な環境の中で教えることができる。
 - ・生徒はホームグループのミーティングや授業に遅れてはならない。また、休まずきちんと出席しなければならない。
 - ・教科書や筆記用具などを持ってくることは生徒の義務である（授業中にロッカーにとりに行くことはできない）。
 - ・生徒は授業の準備や宿題をきちんとやること。
 - ・欠席したためにできなかったことをやりとげることは生徒の義務である。
 - ・カバンを教室に持ち込んではいけない。
 - ・食べ物や飲み物を教室に持ち込んではいけない。また、雨天などの理由で特別に許可されない限り、廊下で飲食をしてはならない。
- (6) 保護者は、望ましい学習環境を維持しようと努力しているC校を支援する義務がある。
 - ・生徒の服装は清潔できちんとしていなければならない。生徒は学校が指定した制服を着なければならない。制服を着用できないときは、保護者がその理由を書いたサイン入りの届けを持ってきて、許可証を入手しなければならない。
 - ・家庭からの届けを持ち、教職員から許可を得た者でない限り、学校を出ることはできない。もし、早退するときは、早退届けにサインしなければならない。昼食を自宅にとることが許可されている者に限り学校を離れることができる。
 - ・欠席や遅刻のときは保護者がサインした届けが必要である。この届けは、遅刻の際はその日に、欠席の場合は次に学校に来るときに持って来なければならない。欠席が3日以上にわたるときは、それがわかった時点でホームグループの教師に伝えなければならない。
 - ・生徒は、保護者からの承諾が得られた場合に限り、校外活動に参加できる。
- (7) 校長や教職員は、生徒の行動規範について公正で常に妥当に対処する義務がある。
 - ・校長や教職員は、規律を守らせる点において公平でなければならない。
 - ・行動規範に違反した生徒に対して、関係する生徒や保護者、教職員と協力して、問題が大きくなる前に対応する必要がある。
 - ・個々の教師は、行動規範に基づいて子どもたちを管理する力量を高める責任がある。それは、生徒の良い行いや努力をしっかり認めるものでなければならない。
 - ・生徒は、行動規範に関して、関係する教師やStudent Welfare Coordinator、あるいは校長と話し合うことができる。
 - ・保護者は、スチューデントダイアリーや電話、あるいは手紙によって、子どもの問題行動を知らされ、また、その問題について教師と話し合うことができる。

以上、3校の行動規範をみたが、いずれもかなり厳しい内容である。しかも、生徒にとって厳しいだけでなく、保護者にとっても厳しい。州はガイドラインで学校への協力を義務付けているが、C校の例でわかるように、保護者は子どもたちの学校生活上のしつげに責任を持たなければならない。

なお、私立学校においても、州は学校の認可や認可見直しの権限を持っていることから、ガイドラインやその指導を尊重せざるを得ない。連邦や州からの補助金や税の優遇策などは私学の経営を左右するからである。

2. 逸脱への対応

Ministerial Orderを根拠に、校長は生徒に懲戒を与えることができる。場合によれば、停学や退学処分も可能である。次に、生徒が行動規範に逸脱した場合の実際の対応について、手続きや懲戒の具体例をみておきたい。

(1) 懲戒の手続き

図1は、D校のスタッフマニュアルにある懲戒の手続きである。州の教育省の指導（The DE&T Discipline Procedures 1994）をダイアグラム化したものだという。ガバメントスクールは、学校間の公平性の確保と

いう点から、概ね似たような手続きをとっているものと考えられる。

これをみれば、軽微な逸脱については、「教室での指導」として処理しているようであるが、より大きな問題になると保護者や行政機関を交えて解決にあたっていることがわかる。

(2) 懲戒の具体例

続いて、日常的にありそうな問題への具体的な対応をみておきたい。表5は私立のE校の例である。私学にはカトリック系とそれ以外のインディペンデント系があるが、E校は後者である。オーストラリアでは罰として「居残り」をさせることが多い。

(3) 州と学校の連携

無断欠席した生徒の保護者に学校が出した手紙を手交することができた。これによって学校と州の連携がうかがい知ることができる。その手紙は我が国では考えられない文面で始まっている（図2）。

どこが考えられないかといえば、州と学校が連名で保護者義務の履行を求めているところである。このことから、州は教育行政の責任者として、学校と一体となって問題に取り組んでいることがわかる。

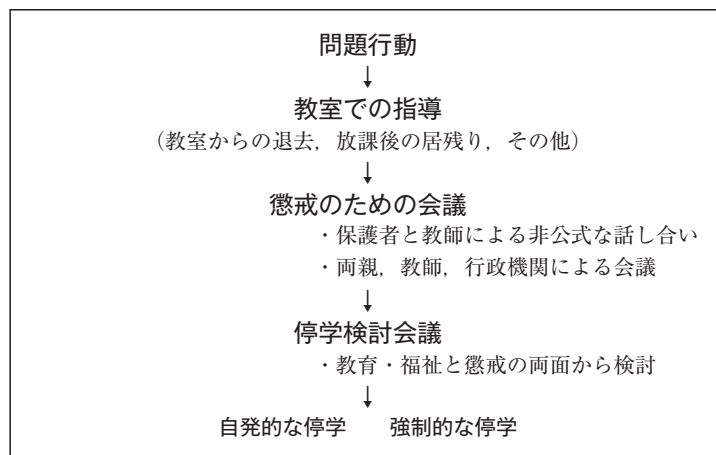


図1 D校における懲戒の手続き

生徒が欠席した理由を学校へ通知してくださるよう、教育省（Department of Education & Training）とF校は要請します。これは保護者が書面で提出していただくことになっています。このことは、保護者と学校にとって、子どもの安全を確保するために必要なことです。

さて、あなたのお子様はホームグループの教師から欠席理由を記した届けを提出するように言われたにもかかわらず…（以下省略）。

図2 F校の“Absence Letter”

表5 E校における懲戒の具体例

(1) 学習

学習課題が達成できなかった生徒は担任教師の監督による居残り。

※居残りは金曜日の午後3時40分～4時30分の時間帯にE組で行う。居残りの間は、自分の学習課題に取り組み、奉仕活動を行う。

※昼休みを用いる場合は、最低30分の昼食時間を与える。

問題が改善されないときは、各学年のStudent Coordinatorと協議して、保護者に連絡することも考える。また、生徒には、毎日、または週単位でStudent Coordinatorか教頭にレポートを提出させることもある。

ただし、次のような場合は懲戒の対象にしない。むしろ適切な支援が行われるべきである。

- ・系統立てて学習する力（Organizational Skills）の欠如している生徒には、学習技術プログラムを施す。
- ・学習や社会的能力の発達に障害のある生徒にはカウンセリングを行う。

(2) 欠席と遅刻

以下に該当するときはStudent Coordinatorの監督による居残り。

- ・欠席あるいは欠課
- ・集会への遅刻（正当な理由がなく、2週間に3回遅刻した場合）
- ・無許可の早退（学校を離れた場合）

(3) 制服

以下に該当するときはStudent Coordinatorの監督による居残り。

- ・制服以外の衣服の着用（靴を含む）
- ・貴金属の着用
- ・（必要なときに）ブレザーを着用しなかった場合

(4) 施設や器物の破損

- ・居残り
- ・修復
- ・弁償
- ・カウンセリング
- ・保護者の呼び出し
- ・退学

Ⅲ. 我が国との相違

我が国の学校教育の事情を知っている人であれば、オーストラリアの行動規範や逸脱への対応が、我々とはどこか違っていると感じられることだろう。それについて、子どもの教育に関わる関係者、すなわち、州、学校、保護者の姿勢という点から整理しておきたい。

(1) 関係者の姿勢

〈州〉

州はガバメントスクールの行動規範のガイドラインを規定し、学校と連携して逸脱への対応を行うなど、積極的なかわりを持っている。私立学校に対しても、認可にかかわる立場から大きな影響力を持っている。

〈学校〉

学校は、厳しい行動規範を設けて秩序を維持しようと努めている。逸脱への対応は、ゼロトレランス的な厳罰主義である。また、学校の外で起きた問題（たとえば万引き）については関与しないということである。

〈保護者〉

子どもの問題は個人的な問題として主体的に解決しようとする姿勢を持っている。また、州が設けた

ガイドラインによって、学校への協力が義務付けられている。

(2) 相違の背景

厳しい行動規範や逸脱への対応はどこから生じるものなのか。個人的な感想を述べてみたい。

ひとつは、オーストラリアが「父性原理」で動いているからではないかと思う。河合（1992）は、西洋は、母性原理の我が国と異なり、父性原理の社会だと述べている。そういう社会では、善悪を明確に区別し、悪をはたらいだ限り処罰は当然と考える。オーストラリアがイギリスの植民地として始まり、白豪主義のもとで西洋的な国づくりがなされた歴史を忘れてはならない。

また、それはそれとして、現在のオーストラリアが世界各地からの移民による多民族社会だということも関係すると思われる。筆者はユダヤ系の人たちが多い地域に住んでいたが、近くにはイタリア系の人たちもいた。イギリス系やキプロス系の友人ができたし、家主はウクライナ系であった。ギリシャやドイツ、ベトナムや中国系のコミュニティーもあった。このような国では、共通のルールを明確にしておく必要がある。そこに我が国のような甘えやあいまいさを持ちこむ余地はない。

IV. おわりに

オーストラリアの中等教育における行動規範や逸脱への対応はなかなか厳しい。一方、我が国はといえば、細かい校則は生徒の自主性を阻害するとの危惧から学校のきまりが見直されてきた経緯があり、また、逸脱への対応は「温情的」ともいえる。オーストラリアに比べると甘いと言わざるを得ない。

それぞれの国にはそれぞれの事情があるので、どちらの手法が正しいかというようなことを軽々しく判断することはできないが、他国を参考にしながら自分の国にふさわしいやり方を考えていくことは大切である。その意味では、オーストラリアは我が国との相違が大きいだけに、参考になるのではないかと思う。

参考文献

The Hands on Guide : School Principals Legal Guide,
CCH Australia Limited
河合隼雄『子どもと学校』, 岩波書店, 1992年